

しんち九条の会だより

第17号

2008/3/25

戦争は人間を悪魔にする

小川 寺島 幹雄氏語る(その4)

抑留問題

○「あごを出す」という言葉は、軍隊から生まれたものかもしれない。人間も極限まで疲労すると、前に進もうとしても身体が動かず、あごだけが前に出る。

○シベリア抑留者は、常にあごを出して働かされていたのだった。極限までの重労働で、フラフラになって就寝した友が、翌朝隣で冷たくなっていることなども決して珍しいことではなかったのである。

○ソ連は第二次大戦の末期8月9日、北東アジアにおいて、日本軍を攻撃し、降伏させ300万人近い日本人を手中にした。しかし、満州、北朝鮮、南サハリン、千島列島からの引き上げを認めず、60万人以上の日本人軍人軍属を、賠償金の肩代わりに捕虜としてソ連へ強制連行した。

そして強制労働をさせられ、冒頭に述べたように、酷寒、飢餓、重労働などで次々と倒れ61,855人の人々が望郷の念を抱きつつ、恨みをのんで死んでいったのである。

○抑留者はソ連全土にわたり配属されたが、私(寺島氏)は2万人の抑留者と共にウズベキスタンに連行された。収容所は三重の有刺鉄線で囲まれ、脱走などはできないようになっていた。

労働内容は多種多様だったが、特に建設関係の重労働が多く、ソ連の戦後復興の全てにかかわった。作業にはノルマがあり達成できなければ「働かざるもの食うべからず」のロシアの鉄則により1日の食料が減量された、これは忘れられない苦痛の体験でもあった。

○昭和23年7月22日、復員者1,988名を乗せた恵山丸が、夢でだけ見ていた懐かしい祖国「日本」、舞鶴港へ入港したのであった。やっと帰ることができたのである。

○ソ連抑留者は、日本が仕組んだ戦争のツケを一身に担って戦後の犠牲となり、その運命は記憶から消すことのできない筆舌につくせぬ飢餓と酷寒の中での強制労働という過酷なものを強いられたのであった。

異国の地で望郷の念を抱きつつ、悲しく死んでいった人々の遺骨は今でも墓もなく風説にさらされ荒れ放題の地に野ざらしの眠りを続けているのが現状である。

○戦後60年が過ぎる……。人間としての極限状態の中を耐えに耐え抜いて生還した私には今なお彼らの、日本で死にたいと叫んでいった無念の声が有りありと聞こえてくる。

(おわり)

日本国憲法

第9条

①日本国民は正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権はこれを認めない。

しんち九条の会

2周年記念の集い

しんち九条の会も来る4月17日で満2年が過ぎます。

この間、皆さんと一緒にいろいろな活動をしてきましたが、横山恵久子さん(相馬市在住で、カンボジアで地雷除去の活動をされた方)を囲んで2周年記念の集いを開きます。ぜひご参加ください。

日時・4月15日(火)

午後7時より

場所・福田「諏訪神社」

社務所

会費・1,000円

(お花見会の費用です)



ユートピア

しんち九条の会代表 目黒 美津英

◇・・・三月も半ばを過ぎると春が隣りまで来たことを実感します。倉島厚氏(元NHK解説員)の「風の色・四季の色」に“春の語源は、万物がハル(発)草木の芽がハル(張)畑をハル(鑿)などといわれ、また英語の春のスプリングの語源は、古い英語で、「突然動く」を意味するスプリガンだそうです。そしてスプリングには「ハネ」「弾力」「泉」「一躍・・・する」などの意味もあります”と書かれています。

◇・・・去る2月23日に相馬九条の会に招かれ、お話をしました。題は「憲法改正の精神構造とその歴史的背景について」というものです。

九条の会が全国的に活動の広がりを見せていますが、一方憲法改正の運動も確実に進められています。

◇・・・このように憲法改正を推進する精神(思潮)的拠り所はなにか、そしてその歴史的背景はどのようなものかを、資料を中心にお話をしました。

憲法改正の思想の根元は、決して戦後急に生まれたものではなく、日本の古代にさかのぼると私は思っています。

◇・・・日本書紀、古事記、南北朝時代に北畠親房が“神皇正統記”を著し、江戸時代に水戸光圀が編さんした“大日本史”などに一貫した潮流があり、これらを背景に明治憲法が作られたと考えられるのです。

◇・・・私たちは平和を守るために憲法九条を守るという考えに立ち行動していますが、日本の歴史を通して国を守るという精神構造はどのようなものであったのかを十分検証する必要がある課題ではないでしょうか。

◇・・・ここまで書いた時、国連難民高等弁務官事務所から“外はすでに真っ暗で、銃を撃ち合う音が聞こえています”とゴシック活字が印刷された手紙が届きました。中には、アフリカのコンゴの難民キャンプ支援の要請と大変な現状が書かれていました。

世界中いたる所で、戦争と貧困が現実の日常としてあることにも私たちはしっかり向き合うことが大事です。



九条の会全国講演会

3月8日東京で開催

「九条の会」呼びかけ人の一人で作家の小田実氏が昨年7月に亡くなりましたが、小田氏の志を受け継ごうと東京都渋谷区で「九条の会全国講演会」が開かれ、会場は、北海道から沖縄まで全国各地から2,300人の参加者で埋め尽くされました。

席上。哲学者の梅原猛さん、作家の大江健三郎さん、90歳になる三木睦子さんなど呼びかけ人7人の方々が講演をされ、日本国憲法の素晴らしさと、それを守る大切さを訴えました。

映画

「早咲きの花」

原町区で上映



去る3月1日、ゆめハットで標記の映画「早咲きの花」の上映会がありました。

戦時中の物資の乏しい中でも子供たちは自分達で楽しい遊びを見つけ、のびのびと生活し、友情を育てていたのですが、やっと中学生になったばかりの子供たちも、学徒動員で軍需工場に配置されることになりました。そんなある日、突如B29による空襲にあったのです。

逃げまどう子供たちの上に容赦なく爆弾の雨が降り注ぎ、ついには全員が死んでしまいました。

戦争の悲惨さを改めて考えさせられる名作でした。